

平成二十八年（丙申）五月三十日

五月廿一日、國語問題協議會主催の講演會にて「ん」の字に就き聴講す。記紀及萬葉の時代、竝に平安初期に「ん」の表記見るなくも、空海により「吽」なる漢字を以て「ん」の表記に代替されたる旨の説を聴く。眞に益多き講演なれども、過去一年關心を抱き來たる「ん」の發音をめぐる本居宣長及上田秋成の間の論争に言及なし。同論争に就き如何なる言及あるや期待寄せたるに、若干の不足感殘る。講演時間中の質疑應答の暇も短く、擧手するも質問する機會得ず。然れども、幸ひ、講演後講演者へ直接質問するを得、是迄の疑問、幾分乍ら漸く解消す。左は其の仔細なり。

宣長は古來日本に「ん」の表記も發音も存在せずと説くに對し、秋成、「ん」表記なしと雖も、「ん」に當る音なしと結論する能はず、とて反論す。『秋成遺文』（修文館、大正八年）編者たる藤井乙男先生、同論争に就き、秋成の方に餘程弱點多し、と秋成の不利を記す。又、橋本進吉先生に依れば、「ん」は平安朝の「音便」と云ふ音變化により生ず。

〔國語音韻の變遷〕『古代國語の音韻に就きて』（岩波文庫、昭和五十五年）例へば、サカナリはサカンナリ、如何にはイカン、アルメリはアンメリ、等あり。この説に従へば、空海は自身の生くる平安期に生ぜし「ん」音に對應する文字に「吽」を充てたるを意味す。然れども、この説に今次の講演を重ねれば、空海生前の平安初期に生ずるなる「ん」の音に表記法なかりけるを、「吽」の一字を充てたりとなす。然らば、空海以前に「ん」には音韻も表記もなしとする宣長派よりも、秋成説を適切とし之に軍配を擧ぐべきや。講演後の寸時の暇に此の點に就き講演者に訊ぬるに、首肯せらる。斯くして漸く一年間の疑問解けり。但し、空海の考案したる「吽」は漢字表記なる故、ひらがな表記の起源に就きては未だ釋然とせず。平安末期、損、陣、隱、難、等其れ迄カタカナ「イ」により代用されたる「ン」の字成るとする説、さらに問答、相聞、等の記述例（佐佐木信綱編『萬葉集』（岩波書店、昭和二年）あれども、其れが如何にして「ん」へと變容せしや明らかならず。今次講演に於ては『古今和歌集』にあるひらがな「む」の形崩れたるを「ん」と類推せしむ見方示唆せらるるも、其れとて複数の通説と同様に確證とは云ひ難し。勿論、小生の不勉強の爲誤解も多かるべく、今後さらに究明し理解深めたし。

扱、國學をめぐる宣長對秋成論争多岐に亙り、「ん」亦その一部なり。純然たる學問上の争點とは別に、兩者の互ひを難ずる歌もまた興味を引く。争ひの激しきを示すが故なり。宣長 上田秋成は大坂の人 清めおく道さまたけて難波人あしかる物をとかめさらめや  
秋成 僻言をいふてなりとも弟子ほしや古事記傳兵衛と人はいふとも  
因みに、蕪村、兩者の論争を次の句にて評す。

蕪村 あらむつかしの假名遣ひやな字義に害あらずんばあゝまゝよ  
梅咲きぬどれがむめやらうめぢややら

當時、此の論争の大きに耳目集めたるを窺ひ知るべし。（了）

（平成二十八年六月十八日受附）